

だから、おまえたちは最低の食事なのだとなびたび病院長の言った言葉が今でも私の頭に残っています。

私は昭和十八年二月、満州第四国境守備隊に入隊、八月終戦を迎え、三年ほど抑留されて、三回ほど生死の境をさまよい、幸いにして帰ってきました。私の一生の中で忘れることのできない惨めな、余りにも過酷な一ページであり、三年が三十年以上もの抑留だと思われてなりません。まさに九死に一生を得た思いで、戦争の可否は体験した者でないとわからないと思います。

戦争済んで入ソ前後の彷徨記

岩手県 佐藤 功

私は、開戦当時の昭和二十年八月、任地龍江省の白城子憲兵分隊に勤務していた。突如として真夜中の二時、隣接する独立鉄道守備隊の被爆が始まる。緊張増せど、何が起きたか。

八月十二日命により所属第十七師団と転進、京白線大賣駅の松花江対岸で応戦準備中、信じがたかった終戦の詔勅を知り、敗戦を惜しみ感涙した当時のことをさまざまに思うのである。戦いが済んだからには首都新京への集結のため、師団とともに出発、新京郊外の寛城子に向かう。駅につくや轟音とともにソ軍のさまざまな航空機が次々と西方から入都し、乗り捨てられた貨車で引込線が埋め尽くされ、緊迫と雑然たる有様の中、ソ軍の指示による自発的に等しい武装解除となり、軍刀除く武器一切を捨てソ軍の監視下に入った。武器を捨てた以上、軍の組織に係る必要もなく自由の身であるのに、互いに頼り合う意識のためか集団から離れまいとする者と、組織のない惨めな集団の行方を案じ、遠慮ない自策を選び、当てもない乱世へ消え去った戦友も多く、前者の私たちは、うわさのように伝わるソ軍の指示で新京西方郊外の日本軍撤退兵舎で待機することになった。

何日経ても何の指示もなく、退屈紛れに同僚四、五人で互頼模索な外出を試みた。十日余りも時が過ぎた

のに、相変わらず日本人だけが行き交う慌ただしい騒々しさの町、時折、ソ軍将校の乗ったジープが通り、不安を隠せぬ満人たちが裏通りからのぞいている。既に万余と南下した街に奥地から避難し入都する軍人や邦人婦人たちで、日本人だけが行き交う大移動であった。街の交叉点にはマンドリン銃持つソ連兵の姿も多く、オンボロ姿の哀れな兵隊は対独戦後の疲労を物語つてもいるようで、井戸の中の蛙が突如として文明の繁世を見たごとく、驚嘆している様子が察せられる。

彼らが理由もなく邦人たちから略奪した腕時計を両腕いっぱいにくわえて、アクセサリーのごとくはめ、得意満面の姿を見ると幼稚な憐れな勝兵である。任務の何たるか知る兵幾ばくあるやと、鉄扉の彼方の本音を知る兵とは認めがたいものがあつた。

奈落へと知れず

郊外で待機すること半月も経つた九月一日、偽り事とも知る由もなく、新京を発つことになる。戦火による被害鉄道復旧作業のためとし、三カ月後には日本に帰国させるといふものである。郊外で待機中の兵科も

多様、中には満鉄職員から満州国勤務の官憲、開拓団と種々雑多な新京編成作業第五大隊千五百名の作業集団が編成され、ソ兵監視する有蓋貨車の身となり行方のあてもない出発となる。当時に思う、帰国への希望を同じゅうし合う群衆意識がある限りさほどの抵抗を感ずることもなく出発したもので、強いられた日本軍の命令に対する忠実感からであり、国際法上の速やかな帰郷事を信じてみたい敗者の心理でもあつた。

出発に当たり新京市内を通過時見た悲しい思い出がある。在京邦人たちの住む仮住まいの窓々からは、元関東軍の変わり果てた我ら作業集団との別れを惜しむ涙声に、やるせない悲別を感じたものである。そして窓々には勝者を歓迎し爾後の優待の願いを込めた真っ赤な御旗が掲げられていたことを、とつさの対応とはいえ大和撫子専用のお腰であろうを悟つたもので、即応的とはいえ皮肉な歓迎を意味してもおり、完全解除であつたわけだが、ソ軍の受けとめ方はいかであつたか知る由もない。

作業集団を乗せた貨車は北進を続け、ハルビン、北

安と、はかどらぬ運行を続け、下車させてくれる様子は一向にない。給食と用便以外の停車なく、逃走を恐れか駅のない見通し良い野外での対応で、鉄道修理等全く感じない。日増しにソ連行きの噂も伝わってくる。貨車の隙間から見る山並みの鉄道沿線至る所に、山と積み重ねられた戦利物資が目につく。時折にソ軍のトラック往来あれど日本兵の姿全く見ることのない、死を含めた完全撤去を物語っているようだった。国境も近いのに停車の都度、逃走する者が出て、銃声が聞こえる。逃れられないのになあ、と戦友の死を悼みつつ、入ソの確実性に寒い暗い車床に沈んだものだ。

新京を發つて半月以上もの長旅に疲れ果て、やるせない。諦めが、離満の最果て黒河への早い下車すら望むほどで、待ちわびた。徒歩の足取りも、理由を忘れ、何日ぶりかの嬉しさを覚えてもいた。離満の果て黒龍江の港まで、途中の沿道至るところ黒々と所狭しと積み重ねた満鉄敷設のレールを取り外し、有刺鉄線の果てまでも軍民と差別なく強奪持ち去る資材は雑多を極め、我々敗者の行方をさまざまに思い、真つ暗闇を渡

るウスリー川のイカダに在つて、たんたんとして流れて去る大河の上でただ一人語ることなく、対岸に映るソ連邦ブラゴエシチェンスクの街灯、一汐に悲しく思つたものだ。

夜も明け、再び貨車内で知る異国シベリアの早霜の寒さを感じつつ、初冬間近なカラ松の黄緑残る異国情緒を誘う白壁のブラゴエシチェンスクを後にして、行く先の知れぬ貨車旅が再び始まつて、西へと走る車窓には帰国の希望は完全に断たれていた。車窓から眺むる沿線は、奥深く連立するカラ松の原始林で埋め尽くされ、過去の認識を改めながら寒い車床に堪えて懸命だった。途中開けたと思えば湿原が続く。満州からの引き揚げ兵団でもあろう疲れ切つた行軍のさまを見たこともあつた。十日余のあてもない広大なシベリア鉄道の長旅にもまれ、我慢の限界を知つたころ、やつとこのことで目的地と思われるスレテンスクに着き、新京を發つてちょうど一カ月、十月も明日に迫つており、長かつた旅にシベリアの大地は果てないところと思つた。

やつとのもので貨車から降りる。またして、それとも三度の災厄、いずことも知らぬ徒歩行軍と車中の疲れを休める間、こともなく強行軍を強いられる。どこに行くんだらう。はげ山同様の小川に沿うてさかのぼり、奥地へと進む。冬を前にして、携行荷物の多かつたためもあつたが、既に体力が疲れ切つており相当の落伍者も出たようだ。雪こそ降らねどシベリアの九月の末は寒く、夜ごと野宿する仮眠の身辺を霜が真白に襲う。いつともなく指示する飯盒炊事で空腹を増す。騎銃持つ連兵が勝手気儘に追いたてる。我慢も限界に近いがどうすることもできない。行軍に堪え兼ねて余分な荷物を捨てる者が出る、そして捨てる者あり。隊列は何料と続き、疲れ切つた哀れな彷徨であつた。スレテンスクを発つて三日目の十月一日、やつとのもので目的地の地シャフタマ部落に着いたころは、過労の余り、今までのつらかつたこと、そしてこれからのことなど思案する気力さえ全くなく、どこであれ、やつとのものでたどり着いた安堵の嬉しさでいっぱいであつた当時の憐れさを想起するのである。

以来、想像を超す、人間であることも忘れたごとき悲しくつらい奈落の彷徨が始まり、経験して知る者だけが綴る事例が皆さんによつて継がれることを思いつつ、投稿枠を閉じ、凍てつきながら北国の果てシベリアで安らかな眠りにも就けず、いつとも知れぬ懐かしの祖国へ帰れる日を待ち続けている戦友たちの御霊に對し、限りない哀惜と冥福を祈りながら、若かつた当時の私たちも七十路を数え幾ばくもない余生を思うとき、今にしてなし得ざれば、冷たく眠り居る戦友の地をだれが知り、だれが伝え連れ戻すことだらう。生前中為すことも知らず、この世を去つてあの世で会うことがあるなれば何と申し詫びができればか。一日も早く戦友の御霊を迎えてやらねばと悲願するこのごろである。

略歴

終戦時所属部隊 満州第一百十七師団（大寶）

（興安憲兵隊白城子分隊）

陸軍憲兵軍曹 旧姓 那須 功

入ソと帰国経路日時 昭和二十年九月黒河入ソ

二十二年四月舞鶴帰国

職 業 專業農家

終 戦

シベリア抑留記

福島県 鈴木正之

出生から入隊

大正十五年十一月二十二日、現郡山市守山町大字正

直字北二十三番地、柳沼家に生まれ、三代田尋常高等

小学校高等科を卒業し、家業の農業に従事していた。

昭和十八年に徴用され、奉天五八一部隊被服廠に軍属

として勤続していたが、昭和二十年五月現地召集を受

け、黒河省孫呉の歩兵部隊（部隊名不詳）に入隊した。

ソ連軍侵攻前

初年兵教育を受けていた。

ソ連軍侵攻

ソ連の宣戦布告とともに、陣地に入り訓練を受けた

が、敵影を見ないうちに終戦を知らされた。

ソ連軍が進駐してきたときは、陣地を撤退し孫呉の

市街の近傍にいたが、終戦間際に命令によって兵舎が

焼き払われていたため、わが隊は演習場の馬小屋、天

幕などに分散していた。八月十八日ごろ武装解除され、

武装ソ連兵に監視されながら、中隊全員で一週間ほど、

一日四往復くらい、旧陣地より後方三キロ〜四キロ地

点に食料、被服などを背負い、搬出させられた。

シベリア抑留地への移動

九月中旬、内地帰還の希望を抱いて孫呉より黒河に

行軍、九月十五日ごろ、外輪船によってブラゴエシチ

エンスクに渡り、部隊編成を崩され、途中ソ連兵の略

奪をうけ、銃剣を突きつけられ、ライチハへ行軍した。

抑留地の生活

ライチハの収容所は以前からあったものだったが、

到着してから増築工事を開始、半地下にするために二

メートルくらいの穴掘り、丸太材を使って収容棟建築

に使われた。この間の食料はコウリヤン、粟などで、

その他に黒パン少量で、不慣れな丸太材工事の重労働